

# Cappella Accademica 47<sup>th</sup> Concert

■J.S.バッハ：カンタータ 140 番「目覚めよと呼ばわる声あり」

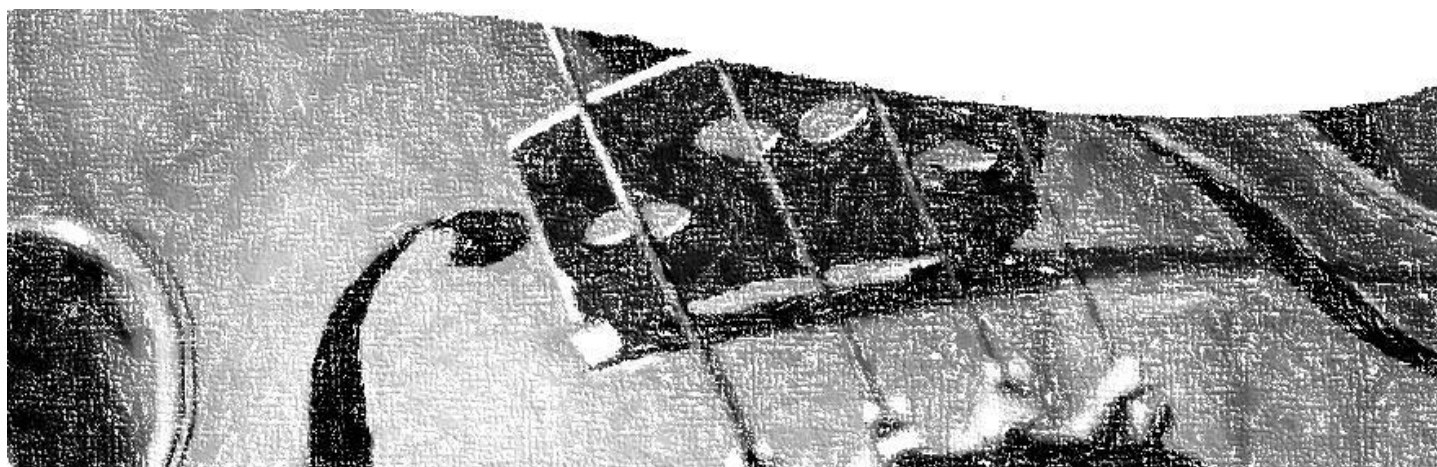
■W.A.モーツァルト：2つのヴァイオリンの為のコンチェルトーネ ハ長調 K.190

■W.A.モーツァルト：交響曲第21番 イ長調 K.134

2016年11月25日（金）

浜松市浜北文化センター小ホール

午後6時開場 午後6時半開演



# 濱田徳昭先生とカペラ・アカデミカ および浜松でのバッハ演奏の歴史

\*\*\* 没後 30 年を経ての感謝 \*\*\*

はまだのりてる

## 濱田徳昭プロフィール

5 才の時から母親にヴァイオリンを学び始める。斎藤秀雄氏に音楽通論とチェロ及び指揮法を、渡部暁雄氏に指揮法を、高折宮次氏にピアノを、入野義郎、箕作秋吉両氏に対位法を、諸井三郎氏に総譜奏法と作曲を学ぶ。1963 年イタリア政府給費生としてローマでオーケストラ指揮を研修、1965 年ミラノで指揮者としてデビュー。1975 年オリジナル楽器による合奏団「東京バッハ・コレギウム」を結成、音楽監督に就く。1976 年全国各地の 10 の合唱団により「日本オラトリオ連盟」を結成、1980 年、1982 年、1984 年の欧州公演で大きな成功を収めた。

教育の面では、広島大学講師、武蔵野音楽大学講師、九州芸術工科大学助教授を経て、明の星女子短期大学教授を歴任。日本演奏連盟評議員も務めた。

1985 年 11 月 18 日に、日本でのオリジナル楽器による、オーセンティックな演奏の先駆者として大いに惜しまれながら、57 才の若さで世を去られた。



## 浜松・豊橋 バッハ事始め

浜松バッハ研究会代表：河野周平

1973 年 3 月 21 日に故濱田徳昭先生の導きにより、浜松・磐田・豊川の有志が「古典合唱音楽研究会」を発足させました。1 年間のセミナーの後、浜松ポリフォニカ・アンブロジーナ、豊橋ポリフォニカ・グレゴリアーナの二つの合唱団が結成され、1974 年 10 月 25 日に「バッハの夕べ」と題した初めての演奏会が浜松市成子町にあったカトリック教会の聖堂で開催されました。その時に編成されたのがカペラ・アカデミカであり、本日演奏されるバッハのカンタータ 140 番が、浜松初の本格的なバッハ演奏として高らかに鳴り響いたのです。その後浜松での濱田先生によるバッハ演奏の伝統は浜松医科大学の合唱団スコラ・カントルム、その後継団体であるアカデミカ・カントルムに引き継がれましたが一旦途絶えました。

その後濱田先生の薫陶を受けた有志たちにより、1985 年バッハ生誕 300 年を記念して「浜松バッハ研究会」が、1994 年には豊橋にも「豊橋バッハアンサンブル」が結成されました。現在は、新国立劇場の指揮者である三澤洋史氏を常任指揮者に迎え、バッハの大曲を中心に演奏活動を続けています。

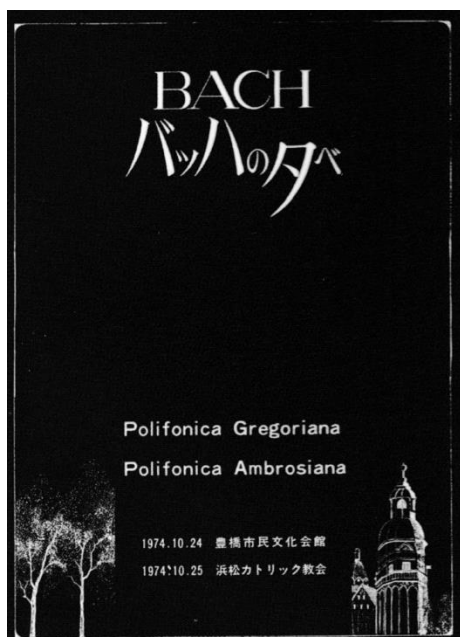
一方、カペラ・アカデミカはその後も絶えることなく独自の演奏活動を継続し、本日実に 47 回目の演奏会を開催する運びとなったわけです。

濱田徳昭先生がオリジナル楽器によるオーセンティックな演奏を目指されるようになってから、浜松・豊橋とのご縁は希薄なものに変わっていき、しかも 1985 年に急逝されてしまってから 30 年も経過してしまいました。しかし先生が蒔かれた種は、浜松・豊橋に限らず日本全国に芽生え、今でも各地で絶えることなく咲き続けています。濱田先生のあの情熱溢れる教えに触れる事がなかったら、私達の現在はどれほど退屈なものであったことでしょう。

濱田先生の没後三十周年にあたり、改めて先生への深い感謝の念を込めてこの演奏を捧げたいと思います。

\*\*\* 私達が濱田先生から戴いた言葉 \*\*\*

人間の成長は諸々の体験によるのではなく、一生心に残るものを、情熱をもって自らの糧とすることによる



1974 年 10 月 25 日「バッハの夕べ」のプログラム表紙と会場風景(カトリック教会浜松)

## 出演者

### 吉川 紀彦 (指揮)

神奈川県横浜市出身。大学卒業後大阪の大手造船所に勤務の傍ら、大阪労音管弦楽団にて練習指揮者兼ヴァイオリン奏者として活動し、1970年に大阪市民管弦楽団の設立に参画。1972年浜松に居住を移し磐田市にある輸送機器メーカーに勤めながら、1974年9月にカペラ・アカデミカを創設。ヴァイオリンを比企康蔵、藤田康夫、指揮法を濱田徳昭の各氏に師事。現在、海外技術コンサルタント業代表を務める傍ら、カペラ・アカデミカ代表を務める。

### 釘本 英範 (ヴァイオリン)

佐賀県鳥栖市出身。5歳よりヴァイオリンを始める。大学卒業後浜松に移り、浜松の大手楽器メーカーに勤める傍ら、カペラ・アカデミカ及び浜松バロックアンサンブルのコンサートマスターを務める。大学時代には濱田徳昭先生指揮の大学オーケストラで、リムスキーコルサコフの交響組曲「シエラザート」のソロを担当。趣味は家庭菜園、休日は借りた畑に通い、主に雑草取りをしながら時々収穫される野菜にこの上もない喜びを感じる。

### 加藤 恵一 (ヴァイオリン)

愛知県豊橋市出身。6歳よりヴァイオリンを始める。大学卒業後東京にある大手電子機器メーカー（本社）に勤め、新日本交響楽団に入団。その後の海外勤務ではデュセルドルフ・フィルハーモニー管弦楽団に所属し、更にインドネシアでは同好会を立ち上げ活動する。帰国後湖西市の工場への勤務を契機にカペラ・アカデミカ入団、現在に至る。

### 小川 佳子 (オルガン)

大阪音楽大学短期大学部を卒業。AN MUSIC SCHOOLにて、ジャズピアノ・ジャズ理論・作編曲を習得。その後ヤマハ音楽振興会ポピュラーピアノ科講師を経て、幅広い音楽の指導にあたり作編曲家として活動、最近ではハープではめずらしいジャズ・ハープの演奏活動にも積極的に取り組む。ハープを田淵順子、ヨーゼフモルナル、篠崎史子、ジャズ・ハープを金井早苗の各氏に、オルガンを志村拓生、濱裕子の各氏に師事。日本基督教団茨木教会、遠州栄光教会のオルガニストを務める。

### 河野 真剛 (バリトン)

パリ音楽院(CNR)ピアノ科、声楽アンサンブル科卒業。モスクワ音楽院声楽科・声楽伴奏科卒業。プレスト・ピアノコンクール(仏)1位受賞。カリニングラード国際歌曲コンクール(露)ファイナリスト。ヤング・プラハ国際音楽祭(チェコ)、グリーンカ生誕200周年音楽祭(露)、ケルチェット音楽祭(伊)、「静岡の名手たち」、オペラ「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」「愛の妙薬」などに出演。合唱団「歌うエスカルゴ」指導者。ヤマハミュージック浜松店、SBS学苑、浜松学芸高校芸術科各講師。フランス語で歌うシャンソングループ「ブルコワ・パ？」主宰。二期会・ロシア歌曲研究会会員。

### カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、故濱田徳昭先生により命名され、1974年9月2日に誕生。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年2回及びその他の演奏会を2~3回開催している。シンフォニーオーケストラとは一味違う、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げること目標としている。

<u>1<sup>st</sup> Violin</u>	<u>2<sup>nd</sup> Violin</u>	<u>Viola</u>	<u>Cello</u>	<u>Double bass</u>	
今井 重人	磯貝 ゆり	木下 正明	佐藤 隆行	小林 哲	
亀坂 美月	加藤 恵一	桑原 義彦	浜島 吉男	早川 浩一	
◎釘本 英範	末田 良	小林はる奈	Lynn Konishi		
林 明子	永井 正子	吉岡 永二			
水谷 緑	村上 香織	吉川 紀彦			◎は、コンサートマスター
<u>Flute</u>	<u>Oboe</u>	<u>English Horn</u>	<u>Bassoon</u>	<u>Horn</u>	<u>Organ</u>
石井 真理	江間由希子	樽林 淳	斎藤 善彦	小出 寿朗	小川 佳子
続 真樹	大橋 弥生			佐藤 博子	

1973年から1985年に至るまで故濱田徳昭氏の薫陶を受けた、浜松・豊橋地区の四つの合唱団の元メンバーが集い、「ポリフォニカ・メモリアルコール」として本日の演奏に臨むが、カンタータ140番はいずれのグループも最初に取り上げた思い出の曲である。また1985年に設立された「浜松バッハ研究会」とその姉妹団体「豊橋バッハアンサンブル」の有志も、合同でこの記念すべきカンタータ140番の演奏に参加する。奇しくも本日は、このカンタータが、バッハ自身によってライプツィヒの聖トーマス教会で初演された日でもある。(1731年11月25日、285年前)

<u>Soprano</u>	井浦芙蓉子	今村 陽子	白井登枝江	手嶋亜彩子	中村 修子
	丹羽多美子	早川 美香	三宅ゆりの	村上 明子	
<u>Alto</u>	渥美 法子	金丸 則子	河野 善子	鬼頭 計枝	小出 佳子
	鈴木 理恵	彦坂 克美	山中 美江		
<u>Tenor</u>	新井 治男	磯貝 光善	河野 周平	丹羽 哲也	村上 裕二
<u>Bass</u>	伊藤以知郎	清原 正高	土川 幸一	安井 研一	山中 進

団員ソリスト テノール：丹羽 哲也 (第2曲) ソプラノ：丹羽多美子(第3曲)・早川 美香(第6曲)

## 曲目解説

### ■J. S. バッハ(1685~1750) : カンタータ 140 番「目覚めよと呼ばわる声あり」

この曲は、詩人・宗教家・音楽家であったフィリップ・ニコライ(1556~1608)の有名なコラール「目覚めよと呼ぶ声あり」をもとに作られたコラール・カンタータです。讚美歌第225番「起きよ、夜は明けぬ」として知られるコラールの全3節が、第1、4、7曲に用いられ、その他の曲は新たにアリアとレチタティーヴォの歌詞が書き加えられたものです。

三位一体節後の第27日曜日のために書かれた楽曲で、バッハがライプツィヒ在任中1731年11月25日の上演の為に作曲され、1742年に再演されたであろうと推察されます。よって三位一体節後第27日曜日に朗読されるべきマタイ伝第25章にある十人の処女の話に題材がとられ、キリストは花婿に、信仰篤きキリスト者の魂は花嫁にたとえられます。この為、このカンタータは婚礼で歌われることもあり、喜ばしく明るく、華やかで壮大な曲です。

構成は、第1番コラール(合唱)、第2番レチタティーヴォ(テノール)、第3番デュエット(ソプラノ、バス)、第4番コラール(合唱)、第5番レチタティーヴォ(バス)、第6番デュエット(ソプラノ、バス)、第7番コラール(合唱)。

### ■W. A. モーツァルト(1756~1791) : 2つのヴァイオリンの為のコンチェルトーネ ハ長調 K. 190

コンチェルトーネとは「大協奏曲」と訳されますが、協奏交響曲(シンフォニア・コンチェルトンテ)と明確な区別はなく、協奏曲(コンチェルト)と交響曲の中間的な趣の音楽で、1770年代前半に北イタリアからオーストリアあたりで愛好されていたと言われていました。独奏楽器はヴァイオリンだけとは限らず、オーボエやチェロも受け持っています(第2楽章カデンツァなど)。また独奏部の演奏にさほど高い技巧性は要求されず、協奏曲より自由な形式の器楽曲と言えます。第2・第3楽章では一瞬「チェロ協奏曲」のような雰囲気を楽しめる部分もあり、二つのヴァイオリン、独奏オーボエ、チェロが協演する豪華な娯楽的作品です。第1・第2楽章にはモーツァルト自身によるカデンツァがあります。

第1楽章 アレグロ・スピルトーソ、第2楽章アンダンテ・グラジオーソ、第3楽章ヴィヴァーチェ。

### ■♪ W. モーツァルト(1756~1791) : 交響曲第21番 イ長調 K. 134

ザルツブルクで作曲されたもので、作られた動機については不明です。交響曲第14番からこの21番までの8曲は、1771年12月から1772年8月までの1年間に作曲されており、「ザルツブルグ交響曲」と呼ばれます。中でも第21番はもっとも充実しており、モーツァルト研究者として名高いサン・フォアはこの作品を「驚くほど想像力豊かで詩的」と評しています。この作品ではホルン2本とフルート2本が用いられますが、この組み合わせで作られた曲は第21番と第27番(K199)のみです。若き16歳のモーツァルトの健康的で澁刺とした個性が漲るハイドンスタイルの名曲です。

第1楽章 アレグロ、第2楽章 アンダンテ、第3楽章 メヌエット、第4楽章